新刊紹介

總說親鸞傳繪

日下無倫著

宗祖親鸞の正傳としては、云うまでもなく親鸞傳繪を第一とするが、然し本願寺草創期の作者覺如の立場や、數次に亙る作者自身の傳繪の書寫、或いは傳繪から御傳鈔と御繪傳とへの分離、及びその後の特に御繪傳の諸形式の變化などを考えると、多くの檢討を要する問題を含んでいる。特に傳繪の記載内容については他に傍證の存する部分と、全く傳繪獨特のものとがあるから、その傳記的正確を期するためには幾多の嚴正な批判を必要とするのである。戰後に於ける宗門内外の諸種の立場からする親鸞の歷史的研究の著るしい進歩に從い、傳繪の史的價値は益々高められつつあるが、それには常に右の諸問題に對する嚴密な考證を伴っていることを注意しなければならない。

本書は故日下教授が昭和十四年夏安居講本として遍述された「本願寺聖人傳繪講要」上下二卷を、藤島教授などの手でやや改變の上、再刊されたものであるから、決して新しいものではないが、然し本書の嚴正な立場に基く緻密な考證と、全舒述内容の妥當性に於て、今日再刊をみたことは眞に當を得たものであり、斯界のためにも喜ばしいことである。以下順を追つて各章の紹介をしてみよう。

前後兩編に分れ前編は研究考證を中心とし、後編は傳繪の逐條解說に當てられている。先ず前編の第一章は「著者覺如上人の略傳」で、特に親鸞、如信、覺如の三代相承論を中心に舒述を進めている。第二章は「親鸞傳繪製作の意趣」で知恩報德と教人信を覺如の著作の動機と考えている。第三章は「親鸞傳繪の歷史的展開」で、本書前編の最も中心をなす部分である。大體、傳繪の最も古く且つ構成を異にするものに專修寺本(上六段、下七段)、西本願寺本(上七段、入西鑑察段加入、下七段)、東本願寺本(康永本。上八段蓮位夢想段、入西鑑察段加入、下七段)の三本が存し、學者によつて三本の製作順序の前後關係について諸種の論がある。例えば故教授の後、昭和二十九年同じく夏安居で傳繪を講じた故藤原猶雪博士などは西本願寺本を初稿本、專修寺本を節減本、東本願寺本を增補改題本として順序を立てている(「親鸞聖人傳繪の研究」)。これに對し著者は、本章第一節で專修寺本を初稿本、西本願寺本を再治本、東本願寺本を重訂本と呼び、傳繪の内容構成の增加に從つて順序を立てている。この當否はここで問題としないが、この三本の成立問題については目下尙多くの論究が續けられているのであつて、この日下說は現在尙有力な學說となつている點を特に注意しておきたい(尙、赤松俊秀教授「鎌倉佛教の研究」、藤島教授「親鸞聖人全集」言行篇解說等參照)。次の本章第二節で御傳鈔と御繪傳の分離に及び、專修寺本系の一幅、二幅、三幅調製の繪傳、東本願寺本系の四幅調製の繪傳及び近世以降の六幅、八幅などの種々の形式の繪傳の諸本について詳論している。第四章は「親鸞傳繪の題號について」で、本願寺號の起源や親鸞聖人の呼稱について說く。第五章「親鸞傳繪を中心とする聖人傳序說」では、傳繪所傳の親鸞傳を中心とする宗祖生涯の行跡に關

する考證で、親鸞日野家出身説以下、つとめて傳繪の所傳を信憑する態度を取り、この點、今日の學界の傾向に先行するものとして注意したい。本章では特に寛嘉三年を以て以前を親鸞の自行時代、以後を化他時代と區分するのが目立つ。以上で前編を終るが、後編に移る前に附錄三章を設け、「本願寺における御傳鈔拜讀史」「本願寺における御傳鈔讀法の變遷」「御傳鈔の註疏について」述べている。何れも從來全く解明されなかつた問題であり、且つ異色ある研究として注目すべきである。後編は全傳繪内容に對する逐條解説で、東本願寺康永本、西本願寺本、專修寺本、千葉縣大原町照願寺本（康永本系）、東本願寺弘願本（康永本系）、流布本の六本を對照し、各段互に對照本文をかかげ、次いで語釋、大意を施し、更に親鸞の系譜、吉水入室、三願轉入、六角夢想、信行兩座などの重要問題について論考を加えている。對照されている諸本は覺如眞筆本、善如書寫本や異系統に屬するものなどの、夫々の意味で最も基本的な重要性を持つもので、これが一見比照され得ることは誠に便利であり、從來試みられなかつたことだけに、學界を裨益するところが大である。また語釋、大意、論考も夫々適切且つ要を得ていて特に初學者にとつて親切である。

以上が本著の大要であるが、尚外に、編者によつて流布本以外の五本の出家學道段詞及び繪、廟堂創立段繪、奥書の寫眞が掲げられて原型比較に便ならしめられ、其他新村出博士撰文の故教授記念碑文や、故教授略年譜、著述論文目錄等が附されている。何分二十年前の論攷であるから、其後に於ける學界の研究成果とやや齟齬を來す箇所も二三あるが、概ねその様な所には編者の手で附註を以て注意されている。全體の舒述の態度としては出來るだけ傳繪の記載を他の文獻との考慮に於て生かすことに努められ、それは何よりも著者の宗教人的愛情に基いていることが感ぜられて奥床しい。そして本書がこのような愛情に支えられているからこそ、單に專門的な論究としてのみでなく、一般的な宗門人の教養書としての意味をも充分持つていることを特に指摘したいとおもう。（昭和三三・一一、史籍刊行會刊。¥一・二〇〇）（柏原）

中國佛教の研究

横超慧日著

太平洋戰爭終了後、すでに十四年を經過しながら、古くは同文同種と慣稱された日本・中國の友交も、政治形態の相違から、いまだに早急にその國交が恢復し得るとの豫測は全く許されない。ことに共產中國における佛教教團の存在も、政治的宣傳のための道具と考えられないでもない一面のあることが、通りすがりの一旅行者にも看取できるような今日、傳統的な儒教精神と拮抗しながらも、二千年にわたつて、中國の思想文化史に重要な影響を及ぼしてきた中國佛教も、もはや一つの終極點に達したかに思われる。このようなときに、わが佛教界における中國佛教の研究は、その史的な研究を中心として、最近一、二年の間に多くの著作が公けにされている。昭和三十二年度のみを例にとつても、唐代佛教史の研究（道端良秀）・日支佛教交史論攷（岩井大慧）・シナ佛教の研究（津田左右吉）・中